わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ

連200載

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

私たちはイジメられている

ニュースとは、newsの日本語訳だ。新しい出来事の複数形。つまり、皆が知らない出来事をまとめたもの、という意味になる。出来事には嬉しいことや楽しいことが含まれているが、なぜか虐待や殺人など嫌な出来事のほうが頭に残りがちだ。

例えば、日本は短期間で稀に見る長寿国になったのに、一方で介護疲れ・高齢者虐待・孤独死が取りざたされると、長寿であることが悪いように思えてしまう。今の若い人が、長生きはしたくないと公言するのも、負の部分の印象が強いからだろう。

最近は、それまで労働力としての評価が低かった女性と高齢者の労働力に期待する政策や論調が多い。世界的に、高齢者とは65歳以上をいうが、寿命が延びたこともあって、65歳は「まだまだ」とみなされる。高齢者の定義を70歳以上に引き上げよう、との意見は先進国にしばしば認められ、ひと昔前の65歳と現代の65歳を比べると、体力諸々10歳近く若返っているとの研究データも多くの目に留まるようになった。

労働力とは、労働をする能力を意味するが、労働力人口というと、15歳以上で仕事をしている人プラス失業者を指す。女性の場合、結婚や出産によって離職するのが当然といった時代が続いたため、年代別の労働力をグラフ化すると、30歳代から40歳代のそれが明らかに減少し、M字型のカーブを描くことが多かったが、近年は未婚や結婚しても働き続ける女性が増え、M字型は解消されつつある。今以上に、さらに女性にとって働きやすい環境を、と国がスローガンを挙げているのは、もっと働けと言っているのだろう。

しかし、そもそも日本の就業率は、諸外国に比べても決して低くはない。15～64歳までの男性のそれは70％、女性では51％。加えて、高齢者の就業率も引けをとらない。2018年日本の65歳以上高齢者の就業率は24％、ちなみにドイツは5・4％、フランスは2・2％で、日本の高齢者の就業率はダントツに高い。

それでも、まだ働け、という。その裏には、高齢者に対しては年金受給年齢の引き上げ、女性に対しては、外圧を意識したポーズ、があるとしか思えない。しかも相変わらず、女性が結婚して子どもを育てつつ仕事をする環境はほとんど進んでいない。例えば、保育園探しでも、仕事がない状態では保育園の申し込みはできないし、保育園に入っていなくては面接の際は相手にもしてもらえない。子どもが病気の時には、肩身の狭い思いをし、同僚の冷たい視線を浴びながら早退せざるを得ない風潮は依然として強い。

なのに、働け働け、の大合唱。

これは国をあげてのイジメではないだろうか。働ける環境が整っていないのに、高齢者や女性にもっと仕事をしろ、という。無理がたたって、労災申請が高齢者に増えているというニュースもあった。仕事を選べない高齢者が、体力・精神力の限界を超えて仕事をしている現実が垣間見えるではないか。

イジメは、近年ハラスメントと言い換えられ、「ハラスメント規制法」が5月に成立した。しかし、罰則規定のない、いわばザル法だ。そりゃそうだろう。国が国民にパワハラをし続けているのだから。これこそ、国際的なビッグ・ニュースに匹敵する大事件である。

イラスト・伊藤栄章
タイトル・浅井健史